

5 今後求められる アトピー性皮膚炎治療の展望

Future prospects for the treatment of atopic dermatitis

波多野 豊

HATANO, Yutaka

大分大学医学部皮膚科学講座教授

Summary

Type 2 サイトカインや JAK を標的とした新規の薬剤が登場してきた。これらの薬剤は、アトピー性皮膚炎 (AD) の病態の 3 つの側面 (皮膚バリア機能異常・アレルギー性炎症・かゆみ) を同時に制御し得る。ステロイド外用薬やタクロリムス外用薬によるプロアクティブ療法には、難治な皮疹のコントロールのみでなく、食物アレルギーの発症予防効果も期待される。細菌叢の異常や発汗異常、角層 pH の上昇などの生理学的異常への対応も AD 治療に新たな展開をもたらし得る。多様な AD の層別化や個別化に伴う既存の治療と新規治療のベストミックスの追求、さらには、医師・患者間のコンセンサスの形成や社会的な問題の解決による、すべての AD 患者が普通に生活できる社会の実現が求められる。

Type 2 サイトカイン

Th2 細胞が産生するサイトカインとして同定された IL-4, IL-5, IL-13 を指す。一方、これらが Th2 細胞以外の細胞 (好酸球, 肥満細胞, ILC2 など) から産生されることが明らかとなり、Type 2 サイトカインと呼ばれるようになった。ちなみに IL-31 も Th2 細胞が産生するサイトカインである。

2 型炎症

Type 2 サイトカインの産生が病態に深く関与していると考えられる炎症である。寄生虫に対する生体防御反応をおもな任務として発達してきたが、喘息やアレルギー性鼻炎、アトピー性皮膚炎などの炎症に深くかわることが明らかとなってきた。

KEY WORDS

Type 2 サイトカイン / 2 型炎症 / 生物学的製剤 / JAK / プロアクティブ療法